

司会（井上輝子）：今日は、行楽日和にもかかわらず、私どものシンポジウムにお出かけくださいまして、ありがとうございます。司会を担当いたします井上輝子です。

本年4月から和光大学人間関係学部は、心理教育学科、現代社会学科、身体環境共生学科からなる現代人間学部に変更いたしました。新しくスタートした現代社会学科のお披露目を兼ねて、学科の専任教員が総出で、今日のシンポジウムを企画・運営しております。

今日のシンポジウムのテーマは、「格差社会日本のゆくえ」です。1990年代末ごろから、「格差社会」論があちこちで、取りざたされてきました。例えば、「勝ち組」「負け組」ですとか、「ワーキングプア」「ニート」などの言葉が、メディアで飛び交っております。70年代から80年代にかけて、「総中流社会」論が喧伝されていたことが、夢のように思われるほどです。近年における貧困層の拡大、自殺の増加、カネをめぐる犯罪の頻発等に見られるように、実際に格差も拡大しており、こうした事態のなかで、人々の不安を背景にして、「格差社会」の議論も重ねられているように思われます。

このように「格差社会」と呼ばれる日本が、今後どのような方向に向かうのか、私たちは何をすべきなのかといった事柄を、家族・移民・ナショナリズムをめぐる言説から考えてみようというのが、このシンポジウムを企画した趣旨です。

今日の問題提起と討論は、現代社会学科の専任教員に加えて、発題者と討論者のそれぞれにお一人ずつ、学外からのゲストをお迎えしております。では、3人の発題者をご紹介します。最初に発題していただくのは、本学現代社会学科准教授の岩間暁子さんで、社会階層論、家族社会学、計量社会学を専攻しております。2番目の発題者は、本学現代社会学科専任講師の挽地康彦さんで、福祉社会学、



歴史社会学、移民研究をされています。最後に発題していただく渋谷望さんは、千葉大学文学部准教授で、文化社会学、文化研究がご専門で、ネオリベラリズムにおける集合的アイデンティティの再編などについて研究されています。それでは、よろしくお願ひします。

[和光大学現代人間学部現代社会学科教授]